

都城のアイデア

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう たけし
伊藤 毅

古都フエへ

ヴェトナムの首都ハノイが日本の東京にあたるすれば、フエは京都によく擬せられる。阮(グエン)朝最後の宮殿がここに構えられ、1802年中国の伝統的な都城に範を求めた王都が建設されたからである。ヴェトナム最後の統一王朝阮(グエン)朝はこの都市で最後の光芒を放ち消えていった。

フエはまたヴェトナム戦争の終盤の激烈を極めた市街戦の舞台となったことでもよく知られる。フエには南ヴェトナム軍事司令部が置かれ、陸軍第一師団が駐屯していたが、基本的には文化都市であり、十分な武装はしていなかった。1968年1月31日解放戦線軍はこの無防備なフエを急襲し、王宮を占領する。その後解放戦線軍とアメリカ・南ヴェトナムとの市街戦は市民をも巻き込み長期化し、2月14日解放戦線軍が王宮を撤退するまでの25日間、フエは深刻な戦禍にさらされたのである。

フエはその後、徐々に戦災の傷跡から立ち上がり、1993年フエの歴史的建造物群はユネスコ世界遺産に指定される。そして2007年3月、はじめて訪れたフエの街は、高級リゾートホテルが立ち並び観光文化都市として往時の輝きを取り戻していた(写真-1)。

理想都市・都城

フエを訪問した理由は、近代になってつくられた都城をみるためだ。都城は本来中国の古代都市であって、唐の長安や洛陽、元の大都などが有名である。日本でも中国都城をモデルに藤原京、平城京、平安京が建設されたことは周知の事実である。また中国の都城は「天円地方」という言葉がよく示しているように、円形をなす天を地上に射影した方形の理想都市であった。都城

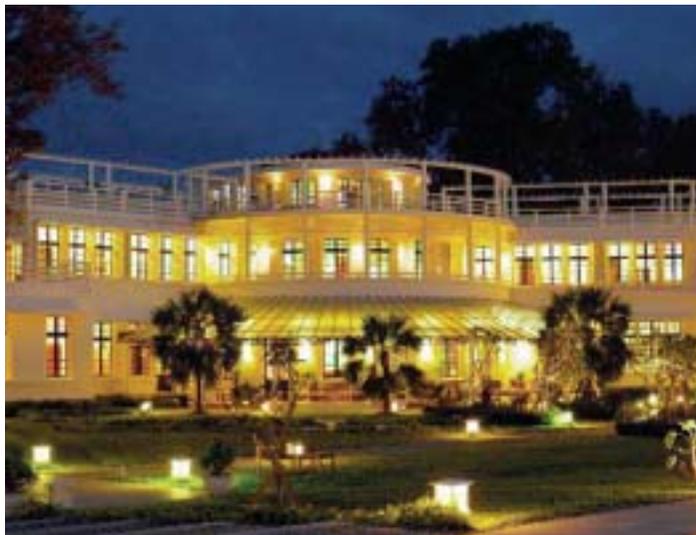


写真-1 フエのリゾートホテル

の中央には天の子たる皇帝の宮殿があり、都市内部は東西南北のグリッド状の道路が整然と通された。日本の都城には都市のまわりを取り囲む羅城がなかったが、中国の都城は外敵から都市を防御するため、都市の四周にはしっかりと城壁と深い堀がめぐらされた。その後も中国では北京などのように都城が継承されたが、基本的には古代的なアイデアとコスモロジーを直接的に投影した都市であったといえる。フエの面白い点は、こうした理念的な古代都市が19世紀に入って再現されたことにある(図-1)。

ラストエンペラー

阮朝は1802年から1945年のおよそ150年間続いたヴェトナム最後の統一王朝である。ヴェトナムは歴史上中国の辺境に位置づけられ、陸続きという地理的条件もあってしばしば強圧的な支配に甘んじてきた。ヴェトナムは中国への朝貢という属国としての大義名分を果たしながらも自立的な国家を建設する道を模索してい

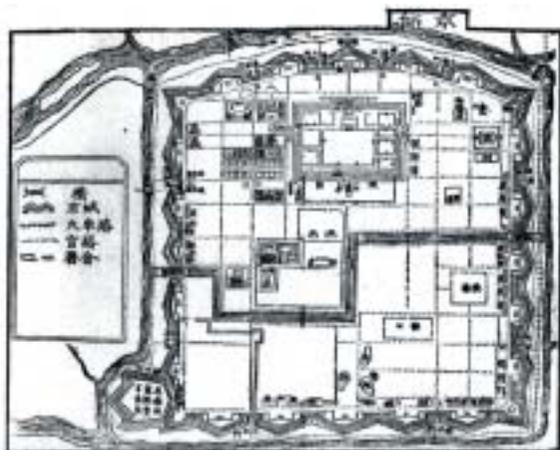


図-1 フェの都城図

た。939年千年に及び中国支配からようやく独立を果たし、国家形成をはかるようになり、李(リ)朝(1010～1225年)、陳(チャン)朝(1225～1400年)、黎(レ)朝(1428～1786年)と王朝交代を繰り返しながら徐々に国家的アイデンティティを形成するが、そのお手本は依然として中国にあった。

黎朝の1527年内戦がおこり、臣下の莫登庸(マク・ダズン)によって王位が篡奪されると、黎王を奉じて対抗する阮淦(グエン・キム)一派と莫率いる一派との戦いが本格し、阮氏はひとまずフェに本拠を移し力を蓄えた。莫一統を倒すために阮氏と鄭氏は共闘を組み成功するが、今度は阮氏と鄭氏のあいだで不和が生じ、両者はやがて対立するようになる。もはや形骸化した黎朝とは別に北ヴェトナムをおさえる鄭氏と南ヴェトナムに勢力を伸ばした阮氏とのあいだで均衡状態がしばらく続くことになる。

両雄にらみ合いの膠着状況に終止符が打たれたのは意外な事件を契機としている。すなわち阮朝の一方的な支配にたいして同志であった西山阮(タイソン・グエン)兄弟が反旗を翻したのだ。その一瞬の際に乗じて鄭氏が南下しフェを占領するに至る。かくして南北

を統一した鄭朝が成立するかにみえたが、今度は鄭氏一族内の熾烈な内紛が原因で阮氏の挽回を許し、最終的に阮氏は1801年鄭氏をついに打ち負かす。この複雑な内乱を最終的に制した阮福映(グエン・ファックアイン)は翌年即位し、年号を嘉隆(ザーロン)とあらため、みずからも嘉隆帝と名乗って最後の王朝時代のスタートが切られる。

2代目の明命(ミンマン)帝と3代目の紹治(ティエウチ)帝の治世下(1820～1847)阮朝は最盛期を迎える。明命帝は国力の増強をはかるかたわら、文芸や外交にも積極的に取り組みフェの文化都市としての基礎が固められる。しかし4代目の嗣徳(トゥドック)帝の1858年、フランスはヴェトナムに開国を迫り、ヴェトナム各地の都市は次々とフランスの保護下に置かれるようになった。フランス支配に反発した清の介入もあって政局は混迷の度を深めたが、1885年ヴェトナムは事実上フランス植民地となる。そして1926年に即位した第13代保大(バオダイ)帝の在位(～1945年)を最後に、阮朝はその150年に及び歴史の幕を閉じたのである。

都城のアイデア

阮朝初代嘉隆帝と2代明命帝の時、フェでは本格的な都城が建設された。都城建設は嘉隆帝即位の翌年1802年からスタートし、明命帝の時代にも建設は継続された。フェの都城は明らかに中国の伝統的の都城を模範としたもので、宮城(紫禁城)皇城(京城)の3郭構成をとっている。城壁は磚(せん)を積み上げた堅固なもので高さ6.6メートル、延長長さ10キロメートルに及び本格的な羅城である。城壁の外周には幅23メートルの堀がめぐり、さらにその外側には幅40メートルの護城河(ホタインハ)を回すという念の入れようである。都城の南には香江(フォンジアン)が流れているが、この水系を最



写真-2 外堀

大限利用した都市設計が行われている(写真-2)。

興味深いのは城壁の建設にあたって、壁が鋸歯状の稜堡(りょうぼ)となる西洋式築城術を採用しているところである。これは具体的にはフランスのヴォーバン式と呼ばれるもので、大砲などの重砲戦から都市を防御するのに効果を発揮する。各稜堡には400基の大砲を装備し、さらに北東角には鎮平台(チャンピндаイ)と称する砲台が置かれるなど、きわめて嚴重な軍事要塞都市となっている。フエはあくまで理想的な中国都城をモデルとしたが、近代的な軍事施設や軍事技術を積極的に採用している点で時代を反映している。

京城の外周にはこのように近代的要素が目立つが、一步城内に足を踏み入れると、そこには伝統的かつ復古的な中国式都城の空間が広がっている。香江に面

写真-3 午門



してたつ皇城はとりわけ中国の正規の皇城を再現すべく意が払われた。南の正門にあたる午門是北京紫禁城の午門を模したもので、明命帝はその技術を学ぶために大工を北京に派遣したと伝えられる(写真-3)。フエの午門はしかし北京そのものではなく、規模はこちらの方が小さく、装飾もヴェトナム独特の華やいだ雰囲気を出している。

写真-4 太和殿内部





写真-5 阮朝高級官僚末裔の家

皇城の公式行事の中心施設となるのが、午門背後に南面してたつ太和殿である。ここには玉座が置かれ、皇帝の即位や外国使節との謁見などが行われた。太和殿は素材・装飾ともに最高級のもが慎重に選ばれて絢爛豪華な殿内空間が現出している(写真-4)。朱塗りの円柱には皇帝のシンボルである金の龍が描かれ、各所のディテールには精巧な工芸品を思わせる華麗な装飾が施されている。その他、皇城内には太祖廟、世祖廟、紫禁城など数多くの殿舎が左右対称性を保ちながら整然と立ち並び、王権の正統性と強大さが表現されたのである。しかし皇城内の殿舎の多くは戦火によって失われたため、現在これらの再現プロジェクトが進行中である。このプロジェクトの立案・実施については早稲田大学中川武教授を中心とする研究グループの国際協力が大きな力となっている。

京城内は都城にふさわしく整然としたグリッド状の道路が縦横に走っている。グリッド内部の街区にどのような建物がたっていたか、古い建物がほとんど残っていないので不明であるが、ここにはハノイのような町屋型の住宅はあまり発達せず、門と塀を備えた屋敷型の建築が一般的だったと想像される。その痕跡は敷地の規模と形状から読み取ることができる。ヴェトナムでは庭を備えた家を「園家」と呼ぶが、フエは川・山・緑豊かな

な風光明媚な庭園都市である。おそらく住宅の庭には庭園都市のミニチュアとして四季折々の草花や盆栽、庭石などによって彩られたのであろう(写真-5)。

郊外の天壇・皇帝陵

阮朝が中国式都城建設に並々ならぬ精力を注ぎ込んだことは、都城だけを見ていてもピンとこない。そのためには都城の郊外へと足を伸ばさなければならない(図-2)。



図2 フエの歴史的建造物分布図(早稲田大学中川研究室作成)

写真6 南郊壇(手前)と御屏山(奥)



都城の南東部に衝立のように立ち上がる山、これはまさに御屏山(ヌイグービン)と呼ばれる山で都城の風水上重要な位置を占めていると伝える。そして御屏山のすぐ西には南郊壇(ダン・ナム・ジャオ)がある(写真-6)。この南郊壇は北京の天壇に相当する施設であり、本来は中国以外につくることが許されない最重要施設といってよい。なぜなら天壇は天の子たる皇帝が天命を授かる場所であり、毎年冬に行われる皇帝祭祀の場であるからだ。郊天祭祀とは皇帝が天から天子として認知されるもっとも神聖な儀式なのである。

それにしても阮朝の創始者たちはどうしてここまで中国式にこだわったのだろうか。ヴェトナムは中国から独立を果たしたとはいえ、国家のアイデンティティとしては依然として中華思想の枠組みのなかにあった。それに代わる新たな国家意識を創出するにはあまりにも中華思想の影響を深く受けすぎている。したがって彼らが王朝の正統性を表現するには中国をモデルにするほかなかったのである。実際、フエの都城建設開始まもない嘉隆3年(1803)には清朝から越南国王に冊封されている。「国王」という称号は、中華世界に属しつつも一定の独立性

が本主中国から認められたことを意味する。

フエ郊外の見所のひとつに数多く点在する皇帝陵がある。初代嘉隆帝以後、各代の皇帝を祀った陵はそれ自体ひとつの小宇宙を形成している。なかでも阮朝末期の啓定(カイティン)帝の陵はその過剰ともいえる装飾で圧巻である。啓定帝陵は都城のはるか南の奥深い山間の地に建設された。厳しい地形条件のなかで敷地の造成が行われたため、他の皇帝陵に比べると敷地は一回り狭く急峻である。こうした地形条件であるがゆえに、陵内の建築には最大限の労力が割かれた。

啓定帝陵は、ヴェルサイユ宮殿を模したと伝えるように、フランス・バロック様式で過剰なまでに装飾がほどこされている。さしずめヴェトナム版日光東照

写真-7 啓定帝陵内部





写真-8 啓定帝

宮といったところか。廟である天定宮は、鉄筋コンクリート造の壁面や付け柱の表面を漆喰・陶片モザイクで埋め尽くしたもので、装飾の極致ともいべき驚異の建築である写真7)。啓定帝の治世は阮

朝末期のフランス植民地時代であり、皇帝はまったくの傀儡にすぎなかった。啓定帝の弱々しい表情の写真のどこからも力強い皇帝の姿は浮かんでこない(写真-8)。廟内を隙間なく埋め尽くされた装飾はこうした悲劇の皇帝への鎮魂歌かもしれない。



水上の生活

郊外の旅から再びフエの町中に戻ってくると、香江上にぎっしりと並ぶ小舟の姿がひときわ目をひく(写真-9)。フエ市が管轄する区域にはおよそ2000の木造の屋根付き小舟が存在し、約2万人の人々が水上で生活しているという。彼らは不法に水上を占拠しているわけではなく、小さな村のような集団を形成し、「万の渡船」と呼ばれている。

水上生活者の起源は明らかでないが、すでにフランス植民地時代の古地図に船を係留する施設が書き込まれていることから、かなり古い段階から存在した集団であろう。彼らは一つの船のなかで生まれてから死ぬまで過ごす。船は生活の拠点であると同時に漁や輸送のためにこの船を使って移動する。都城南端を限るもっとも重要な川・香江を挟んで都城と水上生活者の小舟群が相對峙する姿はいかにもヴェトナム的である。ヴェトナムは建前としては中国の文化や儀式を手本としたが、本音の部分ではこうした在地の生活習俗の共存を許したのである。ここにもヴェトナムの強靱な生命力の一端がうかがわれる。



写真-9 香江の水上生活者